

# 学生の学びはどのように進路意識に 影響を与えているのかⅢ

——家庭環境と学習態度との関わりについて——

牧 野 芳 子

## 【抄録】

本稿では、「大学におけるアクティブ・ラーニング（以下 AL）の影響に関する研究」が、その目的の一つとして「大学の社会連携活動による「地域社会の変容」を挙げていることに着目する。まず、これまで学生に行ってきた実態調査の結果の中から、学生が育ってきた家庭環境についての項目を取り上げ、学生の生育環境とその背景について検討するとともに、地元意識についての項目から、学生と地域社会との関わりについて考察した。そして、それらの内容を踏まえて、今後の調査研究の課題を検討する。

キーワード：家庭環境，学習態度，地域社会，地元意識

## 1. はじめに：問題関心

「大学における AL の影響に関する研究」は、大学における学生の学びの中で、AL の取り組みが、学生自身はもちろん、大学・教職員、企業、地域社会団体にどのような影響を与えたのかを検討することを研究の目的としている。そのことを受けて本稿では、これまで行ってきた学生の実態調査結果を基に、学生と地域社会との関わりについて検討を試みたい。何故なら、学生が生まれ育った家庭と、その家庭を取り巻く地域社会の有り様が、学生の学習意欲や態度及び進路意識に少なからず影響を与えていると考えられるからである。

例えば、幼少期から地域の行事に関心を持ち、積極的に参加したり、親が地域の役員などの役割を果たす姿を身近で見たり、親以外の大人とも親しく関わったりしてきた経験の有無は、学生が周囲の人間との関係をどのように捉えるか、あるいはどのように形成していくかということに繋がる。常に、自分の生まれ育った家庭と地域社会が密接に繋がりをもち、さらに学生自身も地域社会の人々と密な関係を現在まで続けていることが、地域社会と関わる授業や、卒業後の進路にまで影響を及ぼす場合が考えられる。だが、反面それは必ずしもプラスに作用するとは限らない。地域社会との密接な繋がりが、逆に、周囲との人間関係を煩わしいものと認識することになり、AL のように自分から能動的に行動することを求められる学習形態を避けたがる傾向を持つとも考えられる。また、地元をよく知るからこそ、卒業後の進路に選ばないという選択もあり得

る。

一方、昨今、都市化する社会の中で、学生の生育環境である家庭は、地域社会との関わりが不確かなものとなっている傾向がみられる。集合住宅に代表される住環境の変化は、自治会はおろか子ども会への参加も阻む場合がある。移動の自由や、その範囲の拡大は周囲との人間関係を自然に希薄にしていく。核家族が代々続けば、地域社会から孤立した家庭環境が普通になる。そのような家庭や地域環境の中で育ってきた学生は、どのように AL に取り組むのだろうか。「地元」と言える地域社会とのつながりを持つ学生との相違点はあるのだろうか。

そこで本稿では、まず 2012 年度～2015 年度まで行ってきた卒業生への実態調査の結果を基に、学生の生育環境について検討する。次いで、社会学部における社会調査研究演習の授業で行われた調査の結果を参考に学生の地元意識を探ることで、学生と地域社会との関わりについて考察する。

## 2. 学生と生育環境について

### 2-1. 卒業生対象調査から

2012～2015 年度に行われた各年度の卒業生対象の生活および就職状況に関する実態調査であるが、家庭や親の状況について継続して調査された項目の中に以下のものがある。

- ①実家にたくさんの本があるか？
- ②実家に PC があるか？
- ③父親は大学出か？
- ④母親は仕事を持っているか？
- ⑤家の人はニュース番組を見ていたか？
- ⑥家の人はスポーツ新聞を読んでいたか？
- ⑦家の人はパチンコに行っていたか？
- ⑧勉強を促されたか？
- ⑨勉強を見てもらうことがあったか？
- ⑩美術館や博物館に連れて行ってもらったか？
- ⑪絵本を読んでもらったか？
- ⑫手作りお菓子を作ってもらったか？

回答は①～④が「ある」か「ない」かの 2 択で、⑤～⑫については、「全くない」から「頻繁にある」まで 4 段階に分けて尋ねている。

まず、①と②の実家にたくさんの本や PC があるか？との問いに関しては、「たくさんの本がある」と答えた学生とないと答えた学生はほぼ半々であったが、PC については、「ある」と答えた学生がほぼ 90% 超であった。同様に父親の学歴についても大学出か否かについてはほぼ半々

であったが、母親が仕事を持っているか否かは70%超、年度によっては90%以上の母親が仕事を持っていると答えている。⑤ニュース番組を見ていたかどうかは80～90%の家庭で見られていたが、それに対して、⑥スポーツ新聞や⑦パチンコについては60～80%が「全くない」か「どちらかと言えない」とのことであった。⑧と⑨の勉強については促されたことや、見てもらった経験が「ない」と答えた学生がほぼ半数かそれ以上であった。⑩や⑫の項目についても半数以上の学生が美術館や博物館に連れて行ってもらったり、手作りお菓子を作ってもらった経験がなかったが、⑪の小さい頃絵本を読んでもらった経験については、どの年度も70～80%の学生が「ある」と答えている。

また、ここには挙げていないが、家庭の経済水準を聞いた項目では、中の上から下まで、およそ中程度と答えた学生が70%台であった。

これらの調査項目とその結果によって、過去4年間に佛教大学社会学部に在籍した学生の育った家庭環境が一定程度見えてくると考えられる。経済的にはほぼ中程度、いわゆる中流家庭で、共働きによって維持されており、小さい子どもを美術館や博物館へ連れて行く余裕はないとしても、絵本を読み聞かせる余裕はあったようである。成人した学生が、小さい頃の思い出の一つとして親が絵本を読み聞かせてくれた記憶を持っているということは、少なくとも親にそれだけの時間と心の余裕があったと考えられるからである。また、このことは同時に親の持つ文化水準のレベルも推測できる。それは、ニュース番組は見るが、スポーツ新聞を読む習慣もパチンコに行く姿も子どもに見せなかったという結果からも推測出来よう。

## 2.2. 生育環境の背景としての社会

ではそれらの家庭の背景には、どのような社会が存在したのだろうか。ここでは、調査対象となった学生の誕生前後から大学入学前後までの、社会的な背景について考察する。

2012年度から2015年度までに卒業した学生は浪人や留年をカウントせず、普通に入学して普通に4年間過ごし卒業に至ったと考えた場合、その生年は1990～1993年、大学入学時は2009～2012年となる。

その頃の主な出来事を挙げると、生年の前年1989年は、昭和天皇の崩御によって元号が昭和から平成に変わった年である。また、隣国の中国・北京では天安門事件が起きている。1991年はいわゆるバブル景気が崩壊し、1993年には連立政権による細川内閣が成立。1994年にはサリン事件が起こる。1990年には第1回大学入試センター試験が開始、1992年には公立学校が週休二日制となる。

大学入試を迎える2009年は、歴史的な政権交代の年であり、民主党が政権を取ったものの、2011年には東日本大震災と福島原子力発電所事故が起きている。

こうして挙げてみると、調査対象となった学生が、生まれて大学卒業までに過ごして来た年月は、まさに予想もし得なかったような出来事が数多く起き、社会全体が大きく変化してきたと言

える。今までまがりなりにも安定を保ってきたものが、さまざまに崩壊し、社会不安も広がった時期と言えよう。さらに言えば、天安門事件やサリン事件に代表されるような、かなり過激な出来事が世情の不安を煽った時代でもある。少子化が問題になってきたのも1990年代で、教育面では小・中学校時代を通してゆとり教育を受けた世代であり、「ゆとり世代」とも呼ばれる。

つまり、この調査の対象の学生は、家庭的には経済も生活も一定程度安定した環境にあったと言えるが、社会的背景としては、必ずしも安定していたとは言えず、未来への夢や希望、あるいはそれらの実現に向けて思い切った行動を取るといった思考や選択がなされる傾向にはなかったのではないかと考えられる。

### 3. 学生と地域社会との関わりと AL

#### 3-1. 社会調査研究演習における調査結果から

学生と地域社会（地元・近隣社会）への意識については、2014～2016年度に社会学部1回生だった学生を対象としたアンケート調査の中で、「地元意識」について尋ねた項目をピックアップして検討する。

アンケートの中では、地元について「(地元とは)最も長く住んでいる地域」として尋ねている年度もあるが、学生の持つ地元への意識や関わり方について質問された項目の中から、次の項目について取り上げ検討してみた。

##### ①地元とどのような関わりがあるか？

- ・友人知人との挨拶、会話
- ・地域活動や祭りなどイベントへの参加の有無

##### ②地元への意識

- ・愛着があるか、住みたいか、就職したいか
- ・地元で必要とされていると思うか
- ・地元で人間的に成長できると思うか

まず、地元との関わりでは、学生が自宅から通学しているか否かによって変わってくると考えられるが、ここでの結果は、地元の友人・知人とは半数以上が「挨拶をする」とこたえているものの、会話や、家への行き来になると友人と知人ではその割合はかなり差が出ており、友人とのコミュニケーションは50%～60%とそれなりにあるが、知人については15%程度の年度もあった。地域活動やイベントへの参加についても、自宅か自宅外居住かによって参加の程度は変わってくると考えられるが、地域の伝統行事や祭りなどのイベントへの参加や関心は56～59%で、地域の清掃や防犯・防災などの活動への参加が10～23%であることに比べると比較的高くなっている。

地元への意識については、年度ごとに差がある。2015年度は「愛着がある」と答えた学生が

72% に上るのに対して、2016 年度の学生は 47% と低い。だが、2015 年度の学生に地元への居住や就職、結婚についての希望の有無を尋ねた項目では、約 30～40% が「どちらかと言えば望んでいない」という答えを選択している。また、2016 年度の学生は、「地元のことを面白いと思うか・誇りに思うか」との問いに対して、46～47% が「思わない」と答えている。だが、地元での就職に関しては、卒業後から 60 代までの間でいつか地元で働きたいと考えている学生が 54% いて、働くのをやめたら地元に戻りたいと答えた学生も合わせると 73% を超える。さらに、地元で必要とされているか？という問いに対しては、「されている」と思うと答えた学生が 44% になっている。では、その地元で「人間的に成長できるか」どうかに関しては、「できる」「できない」「どちらともいえない」が大体 3 割ずつくらいに分かれる。

2016 年度の調査は、2016 年度入学した学生がようやく半年を終えたころに実施されている。その時点で、こうした複雑な地元意識を持つ学生たちが、この先大学において AL を経験し、2019 年度の卒業までにどう変わっていくのか、あるいは変わらないのか、今後の研究調査の対象としては興味深い。

### 3-2. 学生の地元意識と地域社会

2016 年度の調査結果を、もう少し見てみよう。学生に地元に対する評価や関わりを質問した項目の中で、「地元には伝統文化が伝わっている」「地域の歴史や文化を知っている」については、「伝わっていない」「知らない」と答えた学生が約 30% いたのに対して、「祭りなどの伝統行事を知っている」「地域の歴史や文化を学んだことがある」と答えた学生は約 60% いた。「地域の伝統行事に参加したことがある」と答えた学生も 50% 以上いる。しかし、「地元との関わりがない」という問いに対しては 90% 近い学生が「ない」と答えている。

これらの結果から考えられる仮説としては、おそらく幼少から児童の時期に祭りに参加したり、地域の歴史や文化について小学校等の授業で学んだ記憶があるということであろう。だが、高校、大学と成長していくにつれ、例えば通学距離が長くなったり、課外活動などに追われ、徐々に地域社会との距離も遠ざかっていったのではないかと考えられる。

一方、地域社会では、少子化によって、地域の伝統行事を担う子どもたちの確保が難しくなっている。移動範囲の広がりは、都市への人口流出を増加させ、子どもだけでなく伝統行事を運営する大人の確保さえ難しく、高齢化も進んでいく。そこで地域によっては、伝統行事が廃れないように、祭りの期日を週末に移動させたり、本来なら参加を拒否してきた新住民や女兒にも参加の範囲を広げるという選択をする。つまり、それまで特定の人間以外には閉鎖されてきた地域社会が、必要に迫られてその門戸を開いていく傾向にあるということである。

このような地域社会における傾向は、大学における AL、特に実際地域に入って計画や経験を積む授業に対して有効であるとも考えられる。地元出身者だけでなく、地元以外の学生や大学とも地域社会が連携を重ねることで、今後 U ターンや I ターンの若者を呼び込める可能性等も含

め、地域社会の活性化が望めるかもしれない。

#### 4. 今後の調査研究の課題

今回、これまでに実施したアンケートによる実態調査結果を基に、学生の生育環境とその背景にある社会について若干の整理を行ってきた。このように、学生の属性について範囲を広げて知ること・把握することが、学生を理解しALへの学習意欲や態度の向上に繋がるのではないかと考える。また、学生と地元意識並びに地域社会との関わりについては、今後予定されている様々な聞き取り調査に関して項目を検討し、具体的な事例を引き出せるようにしていきたい。その結果により、学生の地域社会への関心、ALに対する学習態度や意欲との関連を明らかにすることで、ALによる地域社会への影響について分析できればと考える。

#### 参考文献

- ・河合塾編著『「学び」の質を保証するアクティブラーニング-3年間の全国学生調査から-』東信堂 2014
- ・合田博子『宮座と当屋の環境人類学-祭祀組織が担う公共性の論理-』風響社 2010
- ・谷富夫・安藤由美・野入直美『持続と変容の沖縄社会-沖縄的なものの現在-』ミネルヴァ書房 2014
- ・成田秀夫『アクティブラーニングをどう始めるか』(アクティブラーニングシリーズ6)東信堂 2016
- ・藤井和佐・杉本久未子編著『成熟地方都市の形成-丹波篠山にみる「地域力」-』福村出版 2015

(まきの よしこ 共同研究嘱託研究員／佛教大学研究員)